

第1章「異色教師誕生」

0 辞表 ～勤務1日目～

昭和52年(1977年)3月のある夜。家のチャイムが押された。開けてみると大学1～3年まで母校で校庭開放指導員をしたりバレーや水泳を教えていた時の R 校長だった。だいぶ酔っばらっているようで上機嫌だ。でかい声で「おお、北原クン、採用おめでとう。オレの学校に配属されたよ。」採用されたのは嬉しかったが、あの校長の学校とは、と素直に喜べなかった。「お母さん、いる?」母は校長が PTA のお母さん方を集めてやっていた生け花サークルに何回か参加したことがあった。玄関に出て来て一通りのお礼を言った後、母は不機嫌そうな顔で「延晃、塩撒いときな」と言った。母は校長の言動(今で言うセクハラ)がいやで生け花サークルをやめてしまったのだ。それにしても長男の就職の知らせを持ってきてくれたこと(全く非常識な訪問ではあるが)に対して何たること。

4月1日。区役所で辞令伝達式を終えた生まれたてヒヨコ教師の私は校長に連れられて A 中学校に向かった。知っている校長だから緊張感などまるでなしだった。校長室に入って少し話をした後、私はやおら立ち上がって「校長先生、これを受け取ってください」と紙包みを渡した。表には「辞表」。それは前の晩、きちんと正座して毛筆で書いたものだ。校長「???」私「僕は学生時代、教師と警察官だけはやるものかと思っていましたが母校で中学生と触れ合って考え方が180度変わりました。一生懸命やります。しかし、僕がやろうとしていることを学校システムが阻害した時には潔く辞めます。そしてそんな学校システムを批判する側に回ります。」なんと大時代的な言動よ。思

い返しても恥ずかしさの極みだ。校長はと言えば、たった一言「わかった」とボソッとつぶやき、机の引き出しにそれを放り込んだのだ。この校長とは以後何度もケンカすることになる。そのたびに「あっ、辞表があるんだっけ」と肝を冷やしたものだ。

Ⅰ 自信満々の始業式

昭和52年(1977年)4月8日職員朝会で紹介され、私の教師人生が始まった。すぐ始まる始業式のために校庭へ出る。新2,3年生がだらしなく並んでいる…

*ここから先は教育新聞一面コラム「円卓」(2014年4月14日)に掲載されたものです。

「教師Ⅰ日目回想」

赤坂中学校 北原延晃

いよいよ教師生活最後のⅠ年が始まった。思えばあっという間の37年間だった。6つの中学校でいろいろな生徒に出会った。同僚といろいろ楽しいこともした。中でも校内暴力の嵐が吹きまくっていたⅠ校目の印象は強烈だ。昨年、その当時の教え子たちと北海道旅行をして当時のことをあれこれ思い出し、少しずつエッセイを書いている。さまざまな「教育課題」と呼ばれるものに振り回され、かつ世間の冷たい風に叩かれ、なんだか元気がない先生方に向けてだ。まだ公開はしていないが、第Ⅰ話の前半だけをご紹介します。

第Ⅰ話「初出勤」